

哲学者は賢くないのか？

—ヴィーラントが指摘した「帰属の基本的エラー」—

松波烈(京都大学)

本研究発表では、C・M・ヴィーラント(1733-1813)の小作品である『アリストイオン』(1781)における「哲人政治」思想への批判の論点を現代の社会心理学の理論的成果を用いて再評価する。

ヴィーラントの心理学的な問題意識を一言でいえば、人はなぜ与えられている理性を十分に行使しないのか、なぜたびたび愚かな行動をとるのかということであろう。その愚行というのが社会集団規模で観察される事例を描いた長篇が『アブデラ人物語』であるなら、アブデラと同じ古代のギリシャ都市であるアテネを対象としそこの社会集団規模での愚行を描いた短篇が『アリストイオン』である。それは、第一次ミトリダテス戦争の際にアリストイオンというペリパトス派の哲学教員を僭主にしてしまい悲劇を見たアテネ市民の物語であり、それを基にした考察、具体的には、プラトンが主張するような哲人政治は成立しえないし、ナンセンスであるという考察である。その筆致は、一見すると、極端な事例を持ち出してきた上に極論まがいの主張を展開したものに見えてしまう。だがそれは、従来の文科系の研究手法の限界を示している可能性がある。一方、本研究におけるごとく、現代の実証研究である社会心理学の知見を援用することによって、ヴィーラントが実はヒトの認知構造の問題を如実に描いていたことが明らかになると考えられる。

まず、事例として挙げられるアテネ市民の集団的暴走は、集団浅慮(groupthink)や同調圧力などといった心理学的な問題の帰結として読めるように描かれており、決して極端で異常な事例を持ち出したものとは考えられない。そして、この事例をもとに哲人政治思想を批判する際の論点は、現代の実験研究によって妥当性が証明されるものであると考えられる。ヴィーラントが行う批判の1つとして、哲学者が国の経営にすら適合した賢慮ある人間であるという考えが誤判断であるという批判がある。ヴィーラントによると、哲学者とは、哲学者と公認されている人間のことであり、その公認は、一定の社会的立場の公認にすぎない。哲学者の言説に賢慮が感じられるのは、そのような言説を発する立場にいるからであるにすぎない。その者がその者の内的特質によって賢慮であることはいささかも意味されない。すなわち、社会手立場という外的要因によってもたらされるものを、内的特質からもたらされるものと誤って判断してしまっている。これは、リー・ロスらが1977年に実験によって証明した認知バイアスそのものであり、対応バイアス(correspondence bias)と呼ばれるものである。さらなる批判として、哲人政治を哲学者(プラトン)が主張したのは身内びいきだという批判がある。ヴィーラントの主張を追究することで見えてくるものは、ヒトが自己の属する集団をさしたる根拠すらなく必ずひいきしてしまうという内集団バイアス(in-group bias, in-group favoritism)、ムザファ・シェリフらによるサマーキャンプ実験(1954年)によって明らかにされる認知バイアスへの批判である。その批判によって、哲人政治のような思想が、哲学者に関する明確な理論的意識ではなく本能的なバイアスによって主張されているものにすぎないというラディカルな見方が提示されることになる。